

位相共役早稲田国際シンポジウム会議・ フォトリフラクティブ国際会議 参加報告

中 川 清
(神戸大学工学部)

位相共役早稲田国際シンポジウム会議が6月9・10日に早稲田大学国際会議場において、また、6月11～13日に、フォトリフラクティブ国際会議(1997 Topical Meeting on Photorefractive Materials, Effects and Devices (PR 97))が、日本エアロビクスセンタ(千葉県)において連続して開催された。早稲田シンポジウム終了後、PR 97参加者は、国際会議場より日本エアロビクスセンタまで直通バスで送り届けてもらえるという、完璧な連携のもとに両会議は行われた。両国際会議の運営を担当された諸氏のご努力に感謝したい。

早稲田シンポジウムでは、14件の招待講演が行われた。講演は、無機・有機材料だけでなく、半導体材料をも含めたフォトリフラクティブ(PR)材料全般のことから、フォトルテック効果を含めた効果全般、さらに光学情報処理への応用まで、講演内容についてのバランスがよくとれたシンポジウムであった。さらに、講演者は、皆、超有名な研究者であって、講演内容だけでなく、その講演の様子を見るだけでも意義あるものと感じられた。

PR国際会議は隔年に開催される国際会議で、1995年にアメリカ・コロラド州で開催された後を受けての開催となった。この会議は、参加者が同じ施設内に寝泊りして合宿形式で開催されてきたようである。今回は、宿泊用のコテージと会議室が森のなかに点在する施設において合宿形式で行われ、「Topical Meeting in the Forests」と呼ばれるにふさわしい会議であった。参加者の大方は施設内に宿泊していたため、会議初日のポスターセッションが終了したのは午後10時を過ぎていた。朝食のときから講演終了まで、周りはPR効果の研究者ばかりで、まさにPR漬けの3日間であった。国際会議への参加は、最新の研究成果の発表にあることはいうまでもないことであるが、同時に、日

頃、論文の名前でのみ知っている研究者と話ができる点も見逃せない。その点においてこの会議は非常に有益で、筆者も何人かの研究者とフランクに話をすることができた。

会議で発表された論文は157件で、日本国内からの論文は、そのうちの36件であった。日本国内からの発表は、材料から効果、さらに応用まで幅広い分野にわたっていたと感じられた。しかし全体的には、PR材料やPR効果に関する基礎研究が多く報告された。これは、PR効果ならではの具体的な応用がまだまだあまり提案されておらず、アカデミックな興味で研究している人が多いのだろうかと考えられる。筆者自身もPR材料研究の進展を大いに期待している。同時に、PR材料を用いた付加価値の高い光学システムの開発研究のさらなる進展をも期待しているし、微力ながら貢献したいとも考えている。

PR国際会議は、今後も2年に1度世界各地で開催される予定で、今回はデンマークでの開催となる。このときには日本からPR材料の基礎研究や応用分野の提案がさらに活発になされることを期待する。筆者自身もまた雑談目的に参加したいと考えている。

今回の会議の写真が、コロラド大学のAnderson教授により、FTPサイト(aopy.colorado.edu)で公開されている。ユーザー名“anonymous”で、任意のパスワードでアクセスし、“PR97pics”ファイルからFTPすれば、たくさん写真を見ることができる。ただ、懇親会の写真が多く、講演の様子を伺い知ることができない点が少し残念である。

最後に、早稲田シンポジウムとPR97の企画・運営を担当された諸氏のご尽力に、再度、感謝の意を表わして参加報告とする。